

平成 28 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	京都大学大学院	職名	博士後期課程	助成金額	200,000 円
氏名	原 壘	メール アドレス	ruis.hara113@gmail.com		
研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）					
武満徹の作曲技法とその変遷に関する研究					
助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）					
<p>本研究の目的は、戦後日本を代表する作曲家である武満徹(1930 - 1996)が作曲したピアノ独奏曲を主な対象とし、武満の作曲技法の一端を解明するとともに、その変遷を明らかにすることであった。なかでも中期から後期のピアノ独奏曲に関して、同時期に書かれたオーケストラ作品や室内楽作品の楽譜との比較検討を行いつつ分析を行うこととした。助成金は、すべて武満徹が 1970 年代後半から作曲した楽譜の購入に充てられた。研究の結果とした得られた成果について以下に概要を記す。</p> <p>成果①では、武満徹作曲のピアノ独奏曲である《雨の樹素描》(82)と《雨の樹素描Ⅱ》(92)に、同じく鍵盤楽器に属するチェンバロのために書かれた楽曲である《夢みる雨》(86)を加えた三曲について、「雨」シリーズに属する打楽器三重奏曲である《雨の樹》(81)、室内オーケストラ作品である《雨ぞ降る》(82)、室内楽曲《雨の呪文》(82)とあわせた分析を行い、発表した。成果として、これらの作品は武満において多様なリズムと反復表現の探究として特徴づけられることが明らかになった。また、八〇年代の武満徹の作品におけるミニマル・ミュージックからの影響の重要性が詳らかになった。</p> <p>成果②は、成果①により浮き彫りとなった、武満作品におけるミニマル・ミュージックからの影響、あるいはより広く、反復表現について検討する必要性から執筆されたものである。特に武満における反復記号の使用に注目し、60 年代から 80 年代の作品について通史的な検討を行なった。特に後年の作品の検討は、助成金により購入した楽譜により行なわれた。結果として、成果①により既に検討されていた 80 年代におけるミニマル・ミュージックと武満の創作（そこには《雨の樹素描》や《夢みる雨》が含まれる）との関係が、60 年代や 70 年代の作品との相違の下に改めて捉え直された。楽曲への不確定性の導入により特徴づけられる 80 年代以前の作品との対照の下に捉えることで、80 年代以降のミニマル・ミュージックとの関係は、武満のなかで徐々に書法の確定性が増していったことを証すものとして提示された。成果②では、当初の考察対象であったピアノ独奏曲がやや後景に退き、また予定していた《閉じた眼》や《閉じた眼Ⅱ》に関する分析を進めることはできなかったが、武満による作曲活動の変遷の一端を解明するという本研究の大きな目的は果たすことができた。</p>					
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。）					
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)		
①原 壘	武満徹の「雨」シリーズに属する独奏鍵盤作品の分析：第 67 回美学会全国大会研究発表 I-3 〈音楽〉(於同志社大学, 2016 年 10 月 8 日)。				
②原 壘	武満徹における反復記号の使用法—同時代の作品からの影響とその美学の変化—	学会誌『美学』第 251 号掲載予定 (2017 年 9 月 26 日時点).美学会編, 毎日学術フォーラムより発行.	2017 年 12 月 31 日(予定).		